

〔魂の配慮〕

「ともなるイエス」^{*}

池内 功[†]

聖句

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたを休ませてあげます。

（マタイによる福音書 一一章二八節、新改訳）

私はカトリックのドミニコ会が運営する中学高校一貫教育の受験校で学びました。ドミニコ会は、ヨーロッパ、スコラ大学の大学者トマス・アキナスを開祖とし、学問を重視する会派です。学校の玄関の正面にはトマス・アキナスの大き

^{*} 本稿は二〇一一年五月二〇日の本学のチャペルにおいて話した内容を『論集』〔魂の配慮〕として原稿にしたものである。

[†] KEUCHI, Isao 本学文学部教授

な胸像がおかれていました。学校の敷地内の修道院には数名のスペイン人と日本人の神父が共同生活をしていました。私たちは中学入学の際に、全員、聖書を購入しており、倫理の教科は神父が教えてくれました。生徒手帳の表紙裏には、「われらは真理を愛する学徒の集まりである」という言葉で始まり、「愛と光の使徒たらんことを」という言葉で締めくくられる生徒信条が印刷されており、中学校一年生の時は、毎朝、暗誦させられました。そして、愛と光の使徒としての生き方って何なんだろうと思っていました。

中学二年生の時です。講堂に全校生徒が集められ、講演会がありました。壇上に現れた講師は、禪宗のお坊さんの作業着である作務衣のような服をきて、バンドがわりに荒縄を巻きつけた不思議な恰好をしていました。まるで修行僧のような雰囲気です。松居桃樓という作家でした。彼は、あつけにとられている私たちに服装の説明から入りました。南京袋といつて、南京豆つまりピーナッツを詰めて輸送するための麻袋を利用したお手製の服だということでした。松居桃樓先生は、東京隅田川の河畔にあった貧しい人々が暮らすアリの町の住民でした。話の内容は、そのアリの町に住んで人々のために献身的に働き、二九歳で亡くなった北原怜子の生き方についてでした。

北原は、一九二九年、東京で大学教授の三女として生まれ恵まれて育ちました。戦時中、学徒動員により飛行機工場で旋盤工をしました。戦後、今の昭和薬科大学の前身の専門学校に進学し、一九四九年に卒業、その年、洗礼を受けました。浅草に住むようになった二一歳の時、戦災で困難を抱えていた人々を救うボランティア活動に東奔西走していたゼノ修道士に導かれ、屑ひろいで生活する貧しい人々が暮らすアリの町のことを知ります。彼女は、まず、アリの町の子どもたちのためのボランティア活動から始めました。二四歳の時、彼女は外から援助するということをやめ、貧しい人々と共に暮らすためにアリの町の住民となり、二九歳で亡くなったのでした。いつも笑顔顔を絶やさず、重荷を負っている人々のために、命を燃やした彼女を人びとはアリの町のマリアと呼んだのでした。彼女がアリの町に導かれたきっかけは、ポーランド人宣教師のゼノ修道士に、「カワイソウナ人タチノタメ、オイノリタノミマス」と声をかけられたことでした。

松居先生の話は、心に刻み込まれる話でした。恵まれない人、苦しむ人のために命を燃やす生き方があるのだと思い

知らされました。彼女の生き方を通して、ともなるイエスのすがたが見えるように思いました。私は早速、松居先生の書いた『アリの町のマリア北原怜子』という本を読み、さらに感銘を受けましたが、彼女を導いたゼノ修道士の生き方も、松居先生の『ゼノ死ぬひまない』という本で詳しく知ることになりました。そしてゼノ修道士の先生のコルベ神父のことも知りました。ポーランド人のコルベ神父は、ナチスドイツの強制収容所で、重荷を負った人の身代りになって死んだ愛の人です。

ゼノ修道士はコルベ神父に伴われ、もう一人のポーランド人修道士と三人で一九三〇年に来日し、長崎に聖母の騎士修道院を設立し、自分たちが作ったキリスト教のパンフレットを配布したり、聖母マリアの絵姿を美しく印刷した御絵を人々に配って、キリスト教に導く仕事をしていました。長崎で原爆にもあっています。原爆の被害、戦災の被害を目の当たりにしたゼノ修道士は、日本全国の貧しい人、困っている人のために、パンを配り、衣服を配るなどのボランティア活動に積極的に関わっていきます。特に戦災孤児の救いに心を痛め、戦災孤児の収容施設の設定なども行っています。つば広帽子をあみだにかぶり青い目で白く長いひげをたくわえ、修道服を着たゼノ修道士は、片言の日本語ですが、いつも明るく人気者でした。

彼がいかに精力的に活動していたか、一九五五年の記録を紹介しましょう。

一月九日、東京より「米一握り運動」で集めた米、缶詰等を九州不況炭鉱地帯へ送る。

二月一〇日、九州北松鹿町小学校の欠食児童にビスケット、キャラメルを贈る。

三月七日、大阪西成区のテント村に手拭い二八〇本、ビスケット一貫目をプレゼント。

四月二日、小倉の「蟻の街」で日曜学校再建。

同月二〇日、大阪で沢田少年を救済。

同月二七日、長崎・聖母の騎士会で来日二五周年記念式。

五月五日、長崎市竹ノ久保の「蟻の街」城山町の「蟻の街」等の子供三二七〇人を招待、子供慰安会を開く。

同月九日、竹ノ久保の「蟻の街」で屋根の修理。

六月一二日、東京赤羽教会に上野「葬会」、隅田川「蟻の街」の子供二〇〇人を招待。

七月二四日、奄美大島へ行李二六個の品物を送る。

八月、長崎市浦上のバタヤさんのために回収廃品集積所をつくる。

同月二六日から二八日にかけて浜口町にバラックを建てる。

十一月三日、西の宮の武庫川の子供たちにブランコを贈る（枝見静樹『ゼノ神父』による）。

ゼノ修道士の活動について、売名家だという批判もありました。しかし、ゼノ修道士の活動の記録を見ると、とても売名行為でできることではなく、愛の行為であったということがわかります。彼は、たとえば「一九五六年一月一三日、東京で失意のロシア婦人ベルジツカヤさんを救う」とありますように、一人一人の苦しみに向きあい手を差し伸べていたのです。北海道災害救援活動でゼノ修道士に出会った中学一年生が詩を書いていきます。

私たちは

神様を

知らない

でも

神さまを

知っていると

いう人の

目のやさしさが

心にしみる

ゼノ修道士は、五二年間、日本人のために働き、九二歳で亡くなりました。ポーランド人の神父たちがなぜ遠く離れた日本に来たのか？なぜ日本人の救いのために活動したのか？今回、チャペルの準備をしていて、その謎の一端がわかりました。ゼノ修道士が言っています。第一次世界大戦後、ポーランドには、戦災孤児があふれたそうです。その時、

ポーランドの戦災孤児のためにもっとも大きな働きをしたのが、日本赤十字だったのです。皆さんもご存知のように、東北大震災に心を痛めた台湾の人々がすでに百六十億円もの義援金を集め、被災した人々のために送ってくれています。また震災後すぐから、ユウチューブで、年寄り、子ども、若者などあらゆる人々が心から励ましてくれています。カメラに向かって開かれた一人一人の手のひらには、「日本のために祈ってます」というメッセージが日本語で書かれています。お一人お一人の気持ちが伝わってきて、力と希望をいただきました。それは、台湾の大地震の際に、真っ先に駆けつけ、助けてくれたのが日本だったからなのです。だから、ポーランド人の神父たちがポーランドの戦災孤児たちのために働いてくれた日本にこういう志を立て、はるばる極東の地を訪れ、日本人の救いのために尽くしてくれた気持ちは、理解できます。

コルベ神父は六年間、日本で活動し、祖国の修道院長に任命されたために、日本を去りました。一九三九年九月一日、ドイツ軍がポーランドに侵入し、第二次世界大戦が始まります。ポーランドは、ドイツとソ連に分割されてしまいました。コルベ神父は一九四一年二月一七日、ゲシュタポに逮捕され、強制収容所に送られます。彼が発行していた『無原罪の聖母の騎士』という日刊紙がナチに対して批判的であったという理由でした。一九四一年七月末、アウシュビッツ収容所で脱走者が出たため、見せしめのために、無作為に十人が選ばれ、餓死室で餓死させることになりました。選ばれた一人が、私には妻子がいると叫びだすと、神父が自分が身代りになると申し出て、餓死室に入れられ、二週間後、まだ息があつたので薬で殺されたのです。コルベ神父に命を救われたガイオニチエクさんは、アウシュビッツ収容所を生き延び、この事実を伝えることができました。

私は北原怜子、ゼノ修道士、コルベ神父の生き方を若い時に知ったのは、幸せなことでした。神様の導きであつたと思います。高校時代は、ベトナム戦争が激しかった時で、もし神様がいるのなら、なぜ罪のない子どもたちが戦争の犠牲になるのか、という怒りと疑問をレポートにぶつけ、神父から、神の实在は、考えることではない、信じることだというコメントをもらったりしました。そのような疑問をもつても、キリスト教に関心を持続けることができたのは、若い日の北原怜子、ゼノ修道士、コルベ神父との出会いがあつたからだと思います。

疑問をもって何もしないのは、ゼノ修道士を売名家だと批判して、実際に苦しんでいる人には何もしないのと同じです。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたを休ませてあげます」。私たちは、批判をする前に、つかれた人、重荷を負っている人の所に行って、少しでも重荷を負わなければならない。その人たちの悲しみを思わなければならないのです。ゼノさんに捧げる詩を枝見静樹という人が書いています。

一本のローソク

ボランティアの 心の原点は

一本のローソクのように

自らの命の火を燃焼しつつ

人びとの心に 灯をともし

愛のはたらきである

ボランティアの 心の原点は

聖者コルベの 愛のはたらきのように

修道士ゼノの愛のはたらきのように

人びとの心に 灯をともし

アガペの愛のはたらきである

一本のローソクよ

暗やみに 光を放つ ローソクよ

自らの 命の灯を 燃やせ

二エボカラヌフの

かぎりない 愛の灯よ

燃えよ いや高く とこしえに

参考文献

枝見静樹『ゼノ神父』 大空社 一九九八。

戸川志津子『北原怜子』 大空社 一九九九。

松居桃樓『アリの町のマリア北原怜子』 春秋社 一九六三。

松居桃樓『ゼノ死ぬひまない』 春秋社 一九六六。